

公文協歌舞伎の現状と課題

—— 仙台からの報告 ——

深 澤 昌 夫

東日本大震災と公文協歌舞伎

3月11日、東日本大震災が発生した。岩手・宮城・福島、太平洋側東北三県、特にその沿岸部は大津波に襲われ甚大な被害を蒙った。あれから半年以上経つが、各地に残る震災の爪痕は今なお痛ましく、福島では原発事故の影響で半径20km圏内が立ち入り禁止となり、いまだ収束の目途も立たない状況にある。

本来であれば例年7月は歌舞伎の巡業公演があり、学生たちも宮城県民会館*¹で行われる仙台公演を毎年楽しみにしていた。7月初旬といえば仙台はまだ梅雨明け前。夜ともなれば若干肌寒さを感じる季節でもある。それでもあえて浴衣姿で観劇する学生たちもおり、夜の部はぐっと華やいだ感じになる。歌舞伎の仙台公演には、いわば本格的な夏の到来を目の前にした、そんな浮き立つような感覚がある。

ところが今年は、震災の影響で公演が中止になってしまった。学生たちも残念がっていたが、やむをえない。歌舞伎を上演するはずだった各地のホールが被災してしまったからである。

宮城県内でも、今回の地震と津波の影響で、舞台や客席の天井が落下したり、ステージが陥没するなど、甚大な被害を蒙った館がある。あるいは、七ヶ浜国際村や多賀城市民会館のように、ホールじたいが避難所になったケースもある。仙台市中心部にある宮城県民会館は目下、県から貸館中止命令が出されており、さしあたり年内は休館、来年度の施設利用の受付業務もストップしたままになっている。^{*2}

加えて今年の夏は、オイルショックで揺れた昭和49年（1974）以来37年ぶりとなる電力使用制限令が発令された。^{*3} 震災の影響で東北電力と東京電力の電力供給能力が著しく低下してしまったからである。今年度の巡業公演はそうしたことも見越して、あらかじめ3月末の段階で全国3コースのうち東

コースと中央コースの中止が決定された。

例年、宮城県民会館で行われる歌舞伎の巡業公演は、多くの学生にとって生まれて初めて観る「本物の歌舞伎」である。これは東京（歌舞伎座、新橋演舞場等）、名古屋（御園座）、京都（南座）、大阪（松竹座）、博多（博多座）等、全国の大都市圏で行われている松竹主催の商業的な歌舞伎公演（本公演）とは異なり、社団法人全国公立文化施設協会（以下「公文協」）が主催する自主文化事業統一企画の「松竹大歌舞伎」公演、通称「公文協歌舞伎」である。

公文協歌舞伎といえども、出演者はみな松竹専属の歌舞伎俳優であり、本公演でも芯をつとめる幹部クラスの俳優が巡業公演を率いている。舞台の道具立てや下座なども、基本的には本公演に準じたかたちで行われるが、歌舞伎座等で行われている本公演は、通常1日2回公演（入れ替え制）で、昼の部は11時から4時ごろまで、夜の部は4時半から9時ごろまでと、拘束時間も非常に長く、料金も高い。もちろん一幕見の廉価な席もあるし、三階席なら3,000円程度からあるが、一等席など「いい席」で見ようと思えば、昨今15,000円は下らない（栈敷席はさらに高額）。地方在住であれば、さらに上京のための旅費や宿泊費もかかる。とりわけ経済的に余裕のない若年世代にとって（ディズニーランドに出かける余裕はあったとしても）、しょせん縁のない世界である。

ところが公文協歌舞伎は、わざわざ上京しなくても本物に触れることができる。拘束時間も短いし（せいぜい2時間半～3時間程度）、料金も安い。実施館によって若干料金は異なるが、全国的には安い席で3,000円、高くても7,000円程度に設定されている。^{*4} こうした手軽さは、あまり歌舞伎に馴染みのない一般客や学生たちにとって、大事な要素の一つである。

一方、歌舞伎座などにも足を運ぶ芝居好きの観客からは、大半の公共ホールには「花道がなくてつまらない」、多目的であるがゆえに「劇場じたいに味わいが無い」、あるいは上演時間の都合でカットの多い巡業公演は「手抜き」「子どもだまし」「芝居を見た気がしない」など、しばしば不満の声も聞かれる。

ではあろうけれど、巡業公演につきものの種々の制約から、これはもうどうしようもないものとして目をつぶるしかない面もある。むしろ本格的な歌舞伎に親しむきっかけ作り、初心者向けの普及公演として考えれば、公文協

歌舞伎はまず妥当なところではないかと思う。

本学での取り組み

私は平成5年（1993）の本学着任以来、学芸学部日本文学科を中心に近世文学および古典芸能関係の講義を受け持ってきた。また平成11年（1999）からは一般向けの生涯学習講座（当初「歌舞伎入門」、のちに「江戸の文学と芸能」）を担当し、仙台市や民間の文化センター主催の講座を含め、地域の方々（たいていは私よりも年長の方々）を相手に歌舞伎や文楽のお話をさせていただいている。

これまでも学生たちにはできるだけ「生の舞台」に接することを勧めてきた。ゼミの学生たちを連れて東京や大阪、あるいは秋田（康楽館）、あるいは鶴岡（黒川能）、また南会津（松枝岐歌舞伎）などに出かけたこともある。こうした学外活動（見学・実習）は少人数であってもそれなりに手間がかかり、とりわけ引率者にとっては厄介なことが多々あるのだが、それだけにまた忘れられない楽しい思い出である。これがより大がかりになったのは地域の方々を対象にした講座を担当するようになってからである。

歌舞伎など観たことも聞いたこともない20歳前後の学生たちはもちろん、以前から興味は持っていても劇場に足を運ぶ余裕もなく（仕事や子育てで忙しく）、またそのきっかけもなかった、しかし学びへの熱意にあふれた一般の方々（主に50～70代の女性）に、少しでも歌舞伎の魅力を実感してもらいたいと考えていた私は、仙台で歌舞伎が上演される際、ある程度まとまった人数を集め、団体を観劇することにした。全国の公共ホールが集まって「いいものを（東京あるいは歌舞伎座）より安く」というのが公文協歌舞伎のコンセプトなら、我々は団体のスケールメリットによって「いいものをさらに安く、かつできるだけいい席で」を目指したわけである。

仙台公演の場合、わずか1,000円の学生席なるものもある。中には参加者の懐具合を考慮して、あえてそうした廉価な席を利用している学校もあるようだが、席数は限られている上、客席最後列とあって役者はよく見えないし、芝居の面白さはさっぱり伝わらない。そもそも、授業の一環でなければ一生「本物の歌舞伎」に触れることのない人たちかもしれないのだ。そういう人たちにこそ、多少高くても「いい席」で観てもらい、芝居の醍醐味を堪能してもらいたい。そういうわけで、我々は常にS席で観劇することになっている。

もっともS席であっても、団体料金の適用によって経済的なハードル（参加者の負担感）はかなり下がる。さらに、事前にレクチャーを施すことによって「歌舞伎はわからない、つまらない、むずかしい」という心理的なハードル（たいていの場合「食わず嫌い」）を押し下げておく。適切な導入によって「自分たちにもわかる！」ということに気付けば、後は目からウロコの連続である。^{*5} そうすれば今度は自分の目で「本物」が見たくなる。そして、一たび本物に触れ、その面白さに気付いた人々は、また二度三度、舞台上に足を運ぶようになるだろう。そういう目論見であった。

日本文学科の学生や生涯学習の受講者等、本学関係者がまとまったかたちで歌舞伎を観劇するようになったのは平成13年（2001）のことである。以来10年間、平成22年度（2010）までの累計で、のべ2,200人以上が公文協の仙台公演に足を運んだ計算になる。当初70名ほどで始まった、我々のささやかな「歌舞伎鑑賞会」は、10年間で5倍以上、約400名の大所帯となった（平成22年度実績）。このうち、生まれて初めて歌舞伎を観るという学生は、「日本文化史」を選択受講している日文2年生を中心に、毎年100名余り。残りは生涯学習講座の受講生等を含め、大半がリピーターである。

昨今、大学の教育力を数値化して検証・評価しようという動きが顕著だが、本学のようなリベラルアーツ系の大学で（しかも女子大）、ことさら就職に有利とも言えないような文学系の学科は、なかなか目に見える形で実績を示しにくいところがある。そもそも教育効果であるとか教育成果などというものがそう簡単に目に見えるはずもないのだが、一方で、いま述べたようなデータは、目に見える教育成果として示すことができる数少ない例ではないかと思われる。

ちなみに私の担当する授業では、歌舞伎だけでなく文楽も観に行く（今年の巡業公演は昼の部が「野崎村」と「引窓」、夜の部は「合邦」であった）。本学関係の参加者は最近5ヶ年（平成18～22年）の平均で約170人。これに対して歌舞伎のほうは、同じく最近5ヶ年の平均で約300人。長年当地で定点観測してきた者としては、仙台における歌舞伎と文楽の一般的な人気度（関心の程度あるいは動員力）も、割合的にはこのぐらいではないかと思う。

実は、公文協歌舞伎が40年もの長きにわたって毎年仙台で開催されてきたのに比べ、文楽のほうは平成16年（2004）まで隔年開催であった。つまり、仙台で文楽が毎年上演されるようになったのは、ここ5、6年にすぎないの

である。文楽の観劇料は歌舞伎より安い。しかも、毎回人間国宝が出演する。にもかかわらず、残念ながら、それだけでは人は集まらない（もったいない！）。文楽じたいの知名度が低いとか、言葉に節がついていて何を言っているのかわかりにくいとか、理由はさまざまあろうけれど、やはり、ある程度継続性がないとリピーターは育ちにくいのではないだろうか。

本稿の狙い

さて、本稿では我々が毎年お世話になっている公文協歌舞伎について取り上げる。授業の一環として皆で歌舞伎を観に行くようになって10年。私自身この取り組みについて一度振り返っておきたいということもある。また、私の本来の研究テーマは近松だが、戦後の演劇・音楽・舞踊・映画・テレビ・ラジオ等、あらゆるメディアにおける近松受容の実態を総覧した拙著『現代に生きる近松』（雄山閣、2007年11月）の積み残し、いわば「宿題」の一つとして、このところ文楽の観客動向を調査していたこともあって、歌舞伎のほうはどうなっているのか、いささか気になっていたのである。^{*6} 私の見るところ、仙台ではこの10年、歌舞伎の公演は盛況でますますの入りを確認しているように思われるのだが、他の地域では必ずしもそうではないらしい。松竹の本公演（本興行）はともかく、ここで公文協歌舞伎の現状と課題を明らかにしておくことは、歌舞伎の今後を考える上でも十分意義あることと思われる。

いうまでもないことだが、歌舞伎はその大半が松竹の企業活動として行われているため、その実態について必ずしも外部から容易にアクセスできる状況にない。これに対して公文協歌舞伎のほうは、まだしも透明性が確保されている。なぜか。それはこの企画が公共の文化施設が主催する事業だからである。

それでも、以前なら関係者でもない外部の人間がこうしたテーマについて調べるのは難しいところがあった。ところが80年代以降、先進的な地方自治体があいついで情報公開条例を制定し、90年代以降は国レベルで行政改革が進んだ。そして今世紀初頭に情報公開法が制定されると、もはや公的機関の情報公開はあって当たり前という時代になった。^{*7}

また、この間、社会全体でIT化が急速に進展した結果、各地の公共ホールの事業実績に関する詳細な報告書が入手しやすくなった。加えて、公文協

歌舞伎も昭和42年（1967）の第1回公演から40年の節目を迎え、公的な記録として『公文協歌舞伎40年史』の発刊を見た。^{*8}そして何より、主催館（宮城県民会館／宮城県文化振興財団）との長年の信頼関係があって、今回のような公文協歌舞伎への学術的アプローチが可能となったのである。

『公文協歌舞伎40年史』は公文協歌舞伎に関する基礎資料である。同書には公文協歌舞伎の取りまとめ館を務める神戸文化ホールの事業部長だった竹内伸二氏が「公文協歌舞伎の現状からみる問題とその対応策」という論稿を寄せている。本稿は竹内氏の報告を踏まえつつ、宮城県文化振興財団の事業報告書等に記載された仙台公演の実績や同財団への聞き取り調査等、各種資料を交えながら、公文協歌舞伎の現状と課題についてさまざまな角度から考察を進めることにしたい。

私としては、震災で歌舞伎公演のない今年、県民会館がいまだ復旧の目途も立っていないこの時期に、これまでの成果や問題点をきちんと振り返り、外部の目で客観的に評価しておくことが何より重要だと考えている。その意味で、本研究が日頃お世話になっている宮城県民会館や公文協歌舞伎に対して、何がしか資するところがあれば幸いである。

公文協歌舞伎の現状・その1

全国公立文化施設協会は昭和36年（1961）、任意団体「全国公立文化施設協議会」として発足、当初の会員施設数は23館であった。その後、平成7年（1995）に社団法人化し「全国公立文化施設協会」に名称変更、会員数は平成13年（2001）をピークに全国1,405館を数えたが、この頃から地方自治体の財政状況が急速に悪化し、それに伴って行財政改革や市町村の広域合併等が進んだ結果、公文協を構成する正会員は平成23年（2011）現在、1,237館にまで減少した。^{*9}

公文協の主催事業として歌舞伎の公演が始まったのは昭和42年（1967）である。当時、日本社会は高度経済成長の真ただ中。地方の側としては、いながらにして本格的な歌舞伎が見られる、また単独館では実現できないことも共同企画とすることで製作費を抑制できる、等々のメリットがあった。つまり「いいものを、より安く」というわけである。

これに対して松竹の方は歌舞伎役者の大半を独占しており、公文協としては他に選択肢がない以上、誰を出演させるか、何を上演するか、また公演料

をいくらに設定するか、といったようなことがらは（公文協側の要望は要望として）、基本的に松竹が決定権を握っているといってよい。ということになれば、松竹は売り手として圧倒的に優位な立場にあるわけだが、しかし、公文協歌舞伎が始まった当時、松竹の歌舞伎興行は相当厳しい状況に置かれていた。

松竹の役員の一人、岡崎哲也氏は「当時、歌舞伎を取り巻く環境は現在と大きく異なっており、東京の歌舞伎座であつても歌舞伎の本興行が年間7月から9ヵ月程度しか行われておりませんでした。（中略）歌舞伎にとりまして大きな危機でもありました昭和40年代前半に、広く全国のお客様に生の舞台をご覧いただく、そのための組織作りをしていただいたことは、生きている伝統芸能、歌舞伎の生命にとりまして、極めて大切なことでございました。」と述べている。^{*10}

しかも、公文協の提案する巡業公演は、公文協の「自主文化事業統一企画」といいながら、実質的には松竹からの「買取公演」であつた。つまり松竹は、入場券の売れ行きや興行の収支を気にすることなく公演を行うことができ、かつ全国を巡って歌舞伎の愛好家（いずれ松竹の顧客になりうる人々）を増やすことができる、というメリットがあつた。

一方、地方の公共文化施設は、現在はともかく、かつてはほとんど貸館業に終始し、自前のコンテンツを持たず、またそうしたものを育てることも知らなかった。極端に言えば、そのような予算も、権限も、ノウハウも、発想も、地方の館にはなかつた。^{*11} そうした施設（ホール）にとって「自主企画」という名の「買取公演」が相当魅力的に映つたであろうことは想像に難くない。

かくして、売手・買手、双方の利害が一致した公文協歌舞伎は、昭和42年（1967）、全国18館が参加して始まった。公文協歌舞伎はその後、昭和56年度（1981）から東西2コースになり、さらに平成10年度（1998）には、現在のようないくつかのコース・中央コース・西コース、全国約60館、3コース体制に拡充された。^{*12}

公文協歌舞伎はこのように、30年かけて館数・コースとも3倍の規模に発展し、全国各地に「歌舞伎の種」を蒔いてきた。その意味では確かに「地方のニーズがあつた」といってよいのだが、しかしここでいう「地方のニーズ」とは「館のニーズ」のことであり、必ずしも「館のニーズ」即「地域住

民のニーズ」とは限らない。

舞踊評論家で公文協の歌舞伎小委員会の委員を務める平野英俊氏によれば、「公文協側が松竹さんに話し合いをもちたいと申し入れた時は（引用者注一平成10年ごろ）、平均300万円（引用者注一1館あたり）ぐらいの赤字が出ていて」集客に苦勞する館が多く、公文協としてもかなり深刻な問題になっていたようだ。^{*13}

竹内伸二氏の「公文協歌舞伎の現状からみる問題とその対応策」は、平成11年度から20年度まで、10年間のデータとして、3コースの合計で開催館数・公演数・入場者数・収入・支出・収支差額・収支比率を掲載している。これによると、公文協歌舞伎を実施している館は平均61館、支出は全館合計で平均6億円余り。歌舞伎の公演が1館あたり約1,000万円規模の一大事業であることがわかる。その収支比率は10年間の平均で88.7%、平均赤字額は1館あたり111万円。ただし、最近5年間（平成16～20年度）で見ると数字は若干改善されており、収支比率95.5%、赤字額は1館あたり44万円にまで圧縮されている。竹内氏も「全体としては、ほぼ収支均衡しているといえよう。」とこれを評価し、「公立文化施設の「鑑賞型」自主事業の全国平均（引用者注一収支比率）が64.4%（H19年度、公文協調査）であること、また古典・芸能の分野は一般に集客の難しいことを考えると、公文協歌舞伎は健闘しているのではないか。」と述べている。^{*14}

自主事業の全国平均が60%台半ばであるならば、たしかに公文協歌舞伎は「健闘している」部類に入るであろう。とはいうものの、竹内氏の提示する資料では、同じ年でも館によって200万円の黒字を計上している館もあれば、500万もの赤字を抱えている館もある。あるいはまた、同じ館でも600万円近い黒字の年もあれば、同じくらい赤字の年もある。これは歌舞伎に限ったことではないが、興行というものの難しさを如実に物語る資料と言えよう。

公文協歌舞伎の現状・その2

—平成21年度「東コース」を例にして—

グラフ1は平成21年度（2009）の公文協歌舞伎「東コース」実施館24館中、データの入手できた11館について、それぞれ公演1回あたりの平均入場者数と平均入場率を開催地別に比較したものである。

これらの元データはネット上に公開されている各館の運営母体（財団）の

事業報告書に記載されているものだが、実は館によって昼夜別の入場者数を明記している報告書もあれば、反対に合計しかわからないケースもある。また、館によってキャパシティもかなり異なる。そのため、入場者の実数（総数）を直接比べてもあまり意味がない。2,000人収容可能なホールの700人と、800人しか入らないホールの700人とでは、意味合いが全く異なるからである。

そこで本稿では、館の実力（集客力）をより正確に測定・比較するために、同一館で昼の部・夜の部、二部制で行われる場合はこれを2公演（2ステージ）と数え、1公演（1ステージ）あたりの平均入場者数を求めることにした（小数点以下第1位を四捨五入）。また、公演1回あたりの平均入場者数が各館の収容定員（席数）に占める割合を求め、これを平均入場率として示した（小数点以下第2位を四捨五入）。

さて、平成21年度の東コースは片岡仁左衛門が座頭で、『義経千本桜』の三段目が上演された。当代仁左衛門は色気もあって二枚目で、人気・実力とも一級品。仁左衛門の権太なら、公文協としても異論のあろうはずもない。実際、松嶋屋の舞台は全く手抜きのない誠実かつ充実した内容で、しかも「すし屋」のみならず「椎の木」から丁寧に上演したこともあって、観劇した人々は、初めて観る人も、何度も観ている人たちも、みな大満足だった（仙台公演所見）。初めて観る学生たちの中には、幕切れの権太に心を打たれ、本当に号泣している者さえいた（これには私もびっくりした）。

ところが、宮城県民会館のように昼夜2公演で平均入場者が1,200名を超え、館のキャパシティに対する平均入場率も8割に達しようという館がある一方、2,000人収容の大ホールで観客が昼夜合わせて1,100人程度、平均入場率3割弱という館もある。

今回データが入手できた11館（東コースの約半数）のうち、平均入場率で7割を超えているのは3館のみ。11館21公演の平均入場者数は約800名、総入場者数をのべ席数で割ると平均入場率は55.3%となる〔表1参照〕。野球で打率5割なら「化け物」だが、公演関係でこの数字は、いささか「恨めしや…」というところだろう。

ちなみに、これら11館について、公文協歌舞伎の実施回数（公文協歌舞伎を開催した通算年数）と平均入場率との相関を調べてみた〔グラフ2参照〕。一部の例外を除けば、おおむね実施回数の多い館ほど入場率が高いように見える。しかし、必ずしもその仮説が通用しない館もあって、それを一部の例

外とみなしてよいかどうか判断に迷う。現時点では全館のデータが揃っていないわけではないので、実施回数（通算年数）と入場率との間に明確な相関性があるとは言いがたい。と同時に、詳細は省略するが、各館の入場者数や入場率は、開催地域周辺の人口規模や地理的・地域的な事情などともあまり関係はなさそうである。

現状ではデータ不足もあって何とも言いえないところがあるが、一般的に館によって観客の入りに相当差があること、また一部を除き、仁左衛門ほどの人気俳優を以てしても、なお集客に苦労している館が多い、ということがわかる。

こうなると、誰が出るかでも、何を演ずるかでもなく、そもそも周辺地域での歌舞伎そのものの人気度（認知度）の問題か、あるいは観劇行動を阻害・抑制するような経済的な要因などを考慮しなければならないのではないかと思われる。

公文協歌舞伎の現状・その3 —平成11～20年度の観客動向—

前節で見たように、公文協歌舞伎で多くの館が集客に苦労している中、にもかかわらず、毎回一定の集客に成功している館がある。その一つが宮城県民会館である。

宮城県民会館は仙台市の中心部にある。県庁・市役所もほど近く、繁華街も目と鼻の先。終演後、芝居の話をしながらかき食すにも都合がよい。初夏はケヤキ並木の木漏れ日が美しく、冬はイルミネーションが幻想的な定禅寺通りに面している。県民会館が現在地に建設されたのは昭和39年（1964）、当時としては県内最大の大規模多目的ホールであった。宮城県民会館は昭和42年（1967）の公文協歌舞伎第1回実施館（18館）のうちの一つであり、以来現在まで（翌年の第2回公演をのぞけば）毎年欠かさず、40年以上の長きにわたって歌舞伎を上演してきた。

全国の実施館を見ても、40回以上開催している館は宮城県民会館のほか、茨城県立県民文化センター（水戸市、昭和41年開館、公文協歌舞伎は昭和42年度・第1回公演から）、群馬音楽センター（高崎市、昭和36年開館、同じく第1回公演から）、新潟県民会館（新潟市、昭和42年開館、昭和44年度・第3回公演から）等、数えるほどしかない。^{*15}

もっとも、先に見たように実施回数の多い館ほど入場率が高い、というわ

けでは必ずしもない。とするならば、逆に宮城県民会館は実施回数の多さ（実施年数の長さ）と入場率の高さが見事に合致した、ある意味理想的な事例ということができよう。

グラフ3は、公文協歌舞伎全国3コース（東コース・中央コース・西コース）の公演1回あたり平均入場者数と仙台公演のそれを比較したものである。全国平均は前出竹内「公文協歌舞伎の現状からみる問題とその対応策」に示された「松竹大歌舞伎の実績」（3コースの合計、平成11～20年度）^{*16}をもとに、年度ごとの総入場者数を総公演回数で割った数値である（小数点以下第1位を四捨五入）。仙台公演のデータは宮城県文化振興財団の事業報告書に拠り、財団に記録の残る平成5年度から22年度まで、18年間の平均入場者数を算出した。^{*17}

試みに、全国3コース全体のデータが確認できる平成11年（1999）から20年（2008）までの10年間に限って両者を比較してみると、全国3コースの平均入場者数は1公演あたり898人。これに対して仙台公演は1公演あたり1,351人と、全国平均の1.5倍にあたる〔表2参照〕。全国平均との差は最大728人（平成16年）から最小191人（平成20年）の幅で変動しているが、いずれにしても仙台はこの10年間、常に全国平均を上回っている。また、この10年間の入場率を見ても、宮城県民会館は平均85%（平均入場者数1,351／席数1,590）という高水準を維持し、非常に安定した動員力、集客力を有していることが確認できる。

これに対して公文協歌舞伎は、全体として平成11年の994人から平成16年の688人までゆるやかに入場者数を減らしている。一見、平成17～18年に観客数が大幅に増えているように見えるが、これは当該年度の特異性（平成17年は海老蔵襲名披露、18年は勘三郎襲名披露）を反映した一過性の現象で、むしろ例外とみなすべきであろうと思う。

興味深いのは、平成10年以前は仙台でも入場者数の減少傾向が見られる点で、しかもその減少率と平成11年以降の全国3コースの減少率、つまりグラフの傾きがきわめて近似しているという点である〔**グラフ3**参照〕。

いま、手元に平成10年以前の全国データがないのでそれ以上何とも言えないが、一つの仮説として、平成10年以前は仙台も他の地域と似たような状況だったことが考えられる。そこで、試みに愛知県の豊川市文化会館のデータ（平成6～17年）^{*18}を重ねてみると次のようになる〔**グラフ4**参照〕。

豊川市は人口規模約18万人、豊橋市と岡崎市に挟まれた中規模都市である。政令指定都市である仙台とは、人口・面積・都市機能・予算規模・周辺地域における位置付け等々、同一には論じられないが、同市は古くから農村歌舞伎が盛んな土地柄であり、「市川少女歌舞伎」発祥の地でもある。豊川市ではこうした事情を背景に、文化会館が自主事業として歌舞伎の公演を主催するのではなく、民間の社団法人豊川文化協会がこれを主催するかたちをとり、公演の宣伝・チケットの販売等に力を入れている。その結果、豊川市文化会館は席数1,328、昼夜2回公演で、平成16年度以外はまずほどほどの黒字化を達成している。

他のいくつかの都市を調べた限りでは、豊川市の事例は全国3コースの平均入場者数の推移（平成11～17年）とかなりの程度重なるところがある。そこで、仮に平成6～10年の豊川市のデータを全国の平均的な入場者数と見立て、これを仙台公演の実績と比べてみると、仙台は一貫して高い水準を維持しているが、それでも平成11年（1999）までは両者ともゆるやかな減少傾向が確認される。

とするならば、仙台が全国の平均的・一般的な動きとは別に、独自の展開を見せるようになるのは平成12年度（2000）以降ということになる。

宮城県民会館の現状・その1 —平成5～22年度の観客動向—

グラフ5は、平成5～22年度まで、18年間の公文協歌舞伎仙台公演における総入場者数、公演1回あたりの平均入場者数、およびS席料金の推移を表したものである。

入場者の総数では、一見、データの残る平成5年度から現在まで、大きく下落しているように見える。しかし、宮城県民会館は平成12年度から1日限りの昼夜2公演体制になった（それ以前は基本的に2日4回公演。ただし、平成10年度のみ2日3回公演）。その点を考慮しなければならない。そこで、平成11年度までと平成12年度以後を分けて考えてみよう。

平成5～11年度は大きく波打ちながら入場者数が減少している。グラフでは一度大きく減少すると翌年度は若干回復傾向を見せるが、これはたんなる「反動」ではない。入場者数が回復している年は、平成5年の四代目梅玉・九代目福助同時襲名披露に始まって、7年の五代目翫雀・三代目扇雀、11年の十五代目仁左衛門と、平成9年以外いずれも「襲名披露」を掲げた興

行であり、仙台公演の実績を見る限り、歌舞伎の「襲名披露興行」はそれなりに集客力のある企画であるということがわかる（なお、平成9年度は富十郎を座頭とする一座で、やはり実力ある俳優だと客足が戻るといことであろう）。

だが、度重なる襲名披露興行でも入場者数のピーク（平成5年の約5,200人）はついに回復しなかった。宮城県民会館ではこの間、観客数の減少に対応するため入場料金の値上げを繰り返した。^{*19}当初5,000円だったS席を平成9年には5,500円に、また11年には6,000円に、小刻みに、しかし続けざまに値上げしている（学生席以外は同様に値上げ）。そもそも格安だったとはいうものの、それは歌舞伎座などで観劇することを考えれば、という話であって、わざわざ上京して歌舞伎を観るほどでもない一般観客の立場から言うと、やはり3年間に二度の値上げはいささか頻繁で、性急な印象を与えたであろうことは想像に難くない。

ちなみに、S席料金を5,500円に値上げた翌年、つまり平成10年に入場者数が大きな落ち込みを見せている。実はこの年だけ2日3回公演で、例年より1公演少ない。それだけでも（見かけ上）入場者数が落ち込んだように見えるわけだが、同年の1公演あたり平均入場者数は920人と、それ以前の5年間の平均入場者数1,142人に対して200人の減。仮に、例年通りの4回公演だったとしても、総入場者数は3,700人弱。入場率でも6割を切っている。これは折からの景気の低迷に加えて、観劇料金を値上げしたこと、また当該年度の出演者じたいに集客力が欠けていたことなどが複合した結果かと思われる。

その翌年はまた500円値上げして、S席が6,000円になった。この年は仁左衛門の十五代目襲名披露という話題性もあって、料金値上げにもかかわらず入場者数が持ち直している。だが、館のほうは、その翌年（平成12年）からそれまでの2日間4公演体制をやめ、1日限りの昼夜2公演体制に移行した。館側の説明では、大手有名百貨店の顧客向け買取公演（2日4公演のうちの1公演分、顧客に対しては有料の優待公演）がなくなったため、従来通りの集客は困難と判断して1日だけの公演に縮小した、という話だったが、料金の値上げと公演日数の短縮がほぼ同時期に行われたことによって、あるいは、観劇意欲を減退させた人々も少なくなかったのではないかと想像する。

ちょうどこの時期はバブル崩壊後の「失われた十年」にあたる。デフレが

蔓延し、企業のリストラによって人々は職を失い、あるいは所得が伸び悩む中で、宮城県内の歌舞伎観劇人口は90年代に急激に減少した。「失われた十年」に失われた観客数、およそ1,000人。宮城県民会館としては、観客減による収益の悪化、業績の低迷に危機感を抱き、この事態を値上げと公演日数の短縮で乗り切ろうとしたものと思われる。

しかし、地域の人々に質の高い文化・芸術を低廉な料金で普及・提供するという公共ホールの使命・目的からすれば、こうした措置は一見「後退」ととられかねない。何しろ1日昼夜2公演をまるまる削減するということは、仙台の場合、2,000人以上の観客が観劇機会を失うということだからだ。

一方、公演回数の短縮および料金の度重なる値上げにもかかわらず、それでも劇場に足を運ぶ熱心な観客がいることも事実で、館側にそういう意図があったかどうかは不明だが、結果的に、県民会館は「観客を選ぶ」方向に舵を切ったということになる。そしてこの戦略は（やはり結果的に）功を奏し、館側に公文協歌舞伎の実施・運営の安定化と収支の健全化をもたらすことになった。^{*20}

なお**グラフ5**は目盛の刻みが大きく、若干わかりにくいところがあるので、もう一度**グラフ3**を見ていただきたい。すると、リーマン・ショックに揺れた平成20年（2008）以降を例外とすれば、県民会館が1日2回公演体制に移行した平成12年（2000）からこの方、公演1回あたりの入場者数は着実に増加していることがわかる。

これを具体的な数字で見してみよう〔表3参照〕。たとえば、2日4回公演の時の公演1回あたりの平均入場者数と1日2回公演の時のそれを比べてみると、平成5～9年、5ヶ年の入場者数の合計は22,841人。公演回数20回で、1回当たりの平均入場者数は1,142人となる。これは県民会館のキャパシティ1,590人に対して、入場率71.8%となる。これに対して最近5ヶ年（平成17～21年）で見ると、入場者数合計は13,527人と、約9,300人の観客減だが、公演回数は半分なので、1回あたりの平均入場者数は約200人増加して1,353人、入場率も85.1%と、13%以上もアップしていることがわかる。

各年度の平均入場率をもとに、2日4公演体制だった平成5～11年の平均値を求めれば70.2%となる。一方、1日2公演体制に縮小した平成12～22年の平均入場率は86.6%。平成20年（2008）をのぞけば、入場率はほぼ毎年8割超。^{*21} 特に平成17年（團十郎、海老蔵）、18年（幸四郎、染五郎）、

19年（吉右衛門、染五郎）は3年連続で95%を超えている。これはもう驚異的な数字というほかはない。

平成12年以降の仙台公演はまた、集客力に優れ、人気・実力を兼ね備えた俳優が毎年登場したこともプラスに作用した。特に平成14年以降は三津五郎、松緑、魁春、海老蔵と、4年連続で襲名披露が行われ、そのめでたさと華やかさは人々を大いに魅了した。

そうしたなかで唯一、仙台で入場率が6割を割りこんだ平成20年度の公演は、先に見た平成10年度の事例と同様、いくつかの要因が絡んでいる。一つには世界的な金融危機に端を発する景気の悪化によって個人消費に経済的・心理的抑制がかかったこと。もう一つはその前年度に料金の値上げがあったこと。それに加えて役者の問題がある。前年度はそれでも吉右衛門の由良之助（『仮名手本忠臣蔵』七段目「祇園一力茶屋」）だったので入場率95%という数字を達成することができたが、当年は襲名披露が売りだったにもかかわらず、いかんせん主役に華がなかった。その名跡も、中高年ならまだしも若い人にはピンと来ないだろうし、そもそも先代が長年映画やテレビで名を挙げた俳優ただだけに、歌舞伎役者の名前としてはほとんど実績のない名前だったこともマイナスに作用した。

歌舞伎の場合、巡業などによって次世代の俳優を育てることも大切なことではあるけれど、芯になる俳優に集客力がないというのは興行的に致命的ともいえる大きなリスクを抱えることになる。

先に触れた豊川市文化会館の場合も、唯一大幅な赤字を計上した平成16年（2004）の公演は同様の事情が考えられる。仙台公演ではさほど極端な落ち込みは見られなかったとはいえ、平成14年度（2002）以降の4年連続襲名披露公演の中では、やはり集客力の面で力不足の感は否めなかった。

逆に、仙台ではさほどでもないのに、全国的に異様な盛り上がりを見せている年がある〔**グラフ3**参照〕。これは平成18年度（2006）に中央コース以外の東西2コースにおいて、十八代目・中村勘三郎襲名披露公演が行われたことが大きい。しかも、この時の公演では昼夜、別プログラムであったため（昼の部は「身替座禅」、夜の部は「すし屋」）、昼夜両方を観劇するファンが相当いたのではないかと想像される。なお、この年の仙台はなぜか中央コース（幸四郎の「勸進帳」）を選択したため、熱心な歌舞伎ファンはもちろん、勘三郎に注目していた一般の人々が大いに落胆したことは言うまでもない。

ちなみに、公文協歌舞伎が昭和56年（1981）に東西2コースに分かれて以来、両コースを同一俳優の襲名披露にあてたケースは、昭和61年（1986）の当代團十郎に始まる。以後、平成3年（1991）の三代目鴈治郎（現坂田藤十郎）、7年（1995）の五代目翫雀・三代目扇雀、11年（1999）の十五代目仁左衛門、14年（2002）の十代目三津五郎、15年（2003）の四代目松緑、16年（2004）の二代目魁春、17年（2005）の十一代目海老蔵と続く。

ところが、ここがまた仙台と大きく異なるところなのだが、全国3コースの平均入場者数を見ると、少なくとも平成11年度の仁左衛門襲名以後、公文協歌舞伎は全体的に集客力が低下傾向にある。こういう状況をかろうじて持ち直すのに成功したのが平成17年の海老蔵襲名、そして翌18年の勘三郎襲名だったというわけだが、おそらくこれは一時的な現象にすぎない。公文協歌舞伎には、今後中長期的に取り組まなければならない課題がある。

宮城県民会館の現状・その2 — 仙台公演の観客層 —

平成20年（2008）はサブプライムローン問題に端を発するアメリカの金融危機が世界に波及し、日本でも景気が悪化・低迷した。というより、基本的な構図は現在も継続中で、そこに今年（2011年）の場合、3月の大震災や度重なる台風による被害が追い打ちをかけ、さらに「超円高」ともいわれる異常なまでの円高傾向が景気の悪化に拍車をかけている。^{*22}

景気の伸び悩みが消費意欲や購買意欲にブレーキをかけ、その結果、年に一度の歌舞伎見物であっても（あるいは、だからこそ）、そこから遠ざかる人々が増加する、要するに観客が減るということは十分考えられる話であろう。

その点、さすがの仙台も例外ではなかった。1公演あたりの平均入場者数も1,500人台（平成17～19年、平均入場率96%）から900人台（平成20年、平均入場率57.8%）にまで落ち込んだ。けれども、翌年（2009）には若干持ち直し、1,200人台（平成21～22年、平均入場率80.5%）を回復した〔表3参照〕。仙台が他の公文協歌舞伎開催地域と異なるところは、まさにその底堅さにあるように思われる。

仙台の場合、会館のキャパシティの関係で、どんなに多くても1公演あたりの入場者は最大1,590人を超えられないが、むしろ大事なことは、どれほど人が集まらない時でも（たとえば平成10年あるいは20年度公演）、1公演あたり900人程度は手堅いという事実である〔表3参照〕。

1公演あたり900人、昼夜で1,800人、入場率にして約6割。この人数が過去20年余りのデータから割り出した仙台公演における観客数の下限である。いいかえれば、この900人は仙台公演を下支える中核的な観客層ということになる。仙台ではこれに加えて500～600人程度が潜在的な観客層として控えており、条件さえ合えばいつでも劇場に足を運び、大いに芝居を盛り上げる。ただし、安易に料金を上げたりすれば、この層はとたんに劇場から遠ざかるかもしれない。そういう可能性も一概に否定はできない。

もっとも、実際の観客はこんな固定的なものではなく、リピーターから全くの初心者までもっと流動的ではあるのだが、そうした一見捉えどころのない「観客」なるものを、仮にマスとして、スタティックに捉えようとするとなんかこうなる、という一つの作業仮説である。

私の見るところ、先の900人はある程度歌舞伎に慣れ親しんでいて、折々の景気動向に関わらず「芝居を見る」「歌舞伎を観る」「歌舞伎だから観る」という愛好家層。一方、あとの500～600人は「歌舞伎を観る」というより「俳優を見る」「知っている俳優が出るから観る」という、より一般的な観客層とでもいえようか。

「俳優を観に行く」というのは、歌舞伎の楽しみ方としてはある意味まっとうな姿勢ではあるのだが、人気や実力のある俳優が出演する時はいいけれど、そうでない時はホールに閑古鳥が鳴く可能性もあるわけで、その点、劇場側としてはリスクを負うことになる（かといって、リスクのない興行などというものは存在しない）。いずれにしても、公文協歌舞伎の今後の運営に関しては、この二つの観客層の動向に注意を払う必要があるだろう。

では、仙台において前者のような観客層がどのようにして形成されたのかという問題だが、一つには、これはかつての2日4回公演体制の「遺産」ではないかと思われる。先に指摘した如く、仙台では平成11年以前、2日4回公演だった。具体的にいえば、仙台では2日で4,000～5,000人の人々が歌舞伎を観劇していたのである。それが1日2回公演体制に移行した結果、入場者数は最大3,000人程度になった。ということは、仙台には1,000～2,000人の余力があるということになる。かてて加えて、我々の他にも団体が観劇しているグループがあり、昼夜の平均で入場者の約34%が団体扱いだという（買取公演をやめた大手百貨店や公務員関係の団体、生協、企業等）。景気の低迷や全国的な観客数の減少傾向にもかかわらず、仙台がある程度の水準を

維持している背景には、こうした人々の存在があるはずである。

しかも、興味深いことに、こうした人々はたんに「歌舞伎の愛好家」というだけでなく、どうやら「宮城県民会館で行われる歌舞伎の愛好家」という側面を持っているらしいのである。

仙台では、毎年ではないけれど、夏の公文協歌舞伎とは別に、秋にも歌舞伎の公演（巡業公演）が催されることがある。もちろん主催者も違えばホールも異なる。だが、観客（愛好家）にとってそんなことは問題にならない。夏の歌舞伎であれだけ集まるのだから、仙台は相当歌舞伎好きが多い街……かと思いのほか、どうも秋公演はうまくいかない。昼はまだしも夜はさっぱり。秋風が吹いている。季節がわるいのか（芸術の秋なのに？）、場所がわるいのか（主要ホールはたいてい地下鉄の出入口に立地しており、アクセスだって必ずしも悪くないのに？）、観客がわるいのか（女心と何とか？）、これまで何度開催しても県民会館ほどの入りは得られない。そうなると、主催者としては毎年開催することができない。興行として定着しない。ゆえにリピーターが育たない。悪循環である。

もしかすると仙台では、「歌舞伎は夏の風物詩」という意識が刷り込まれているのかもしれない。あるいは、「歌舞伎は宮城県民会館で観るもの」と思っている人が多いのかもしれない。はたまた、「歌舞伎は年に一度で十分」と思っているのかもしれない。いずれにしても同館は、市内・県内で行われる歌舞伎の公演に関して、一種ぬきんでた特別なステータスを有しているように思われる。

先述したように、宮城県民会館は市の中心部に位置しているため、街中で買い物ついでに立ち寄ることもできるし、観劇後の飲食にも不自由しない。仙台地下鉄南北線・勾当台公園駅から徒歩5分、JR仙台駅からアーケード街を歩いても30分ほどの距離にあって、宮城県全域からのアクセスもそうわるくない。これに対して仙台市青年文化センターやイズミティ21等、仙台市の主要ホールは郊外に立地しており、必ずしも交通の便がわるいわけではないが（あるいは観客の過半を占める中高年にとって、地下鉄は階段の昇り降りがつらいか？）、観劇のついでに買い物したり食事したりお茶を飲んだり、という点ではあまり見るべきものがない。「演劇鑑賞」ならともかく、「芝居見物」にとって、こうしたついでがきわめて重要な部分を占めているということはもう少し考慮されてよい。その点、宮城県民会館は、築年数が

古く、施設したい必ずしも新しいわけでもないし、アメニティの面でそうそう快適なわけでもないけれど、宮城県内では総合的に見て、これが最もいい劇場なのだろうと思う。

ところで、県民会館が毎回とっているアンケート結果によると、仙台公演の観客の8割は女性であり、全体の55.5%が50代以上である（平成17～21年度、5ヶ年分の平均値、平均回収率19.8%）。

これはどの劇場に行っても同じだろうが（客席を一瞥すればだいたい様子はわかる）、公文協歌舞伎を支えている主力層は中高年の女性たちである。この層は一般に歌舞伎やミュージカルなど、割と大がかりなエンタテインメントを愛好し、熱心なりピーターとして興行界を支えている。

とはいえ、時とともに観客の高齢化は進行する。仙台に1,000～2,000人程度の余力があるといっても、それはあくまで過去のデータに基づいた仮説の話であって、県民会館とていつまでも2日4回公演時代の余禄で食いつなぐことはできない。観客の高齢化がさらなる観客増をもたらす面もあれば、観客減につながる可能性も否定できない。

当地に仙台演劇鑑賞会という会員制の組織がある。私も以前会員だった。設立以来50年以上の歴史を有する老舗鑑賞団体である。同会が鑑賞例会に取り上げるのは、いわゆる新劇系の舞台であり、その会員層が歌舞伎などの観客層とどこまで重なっているかは不明だが、仙台における観劇人口の推移や芸能・演劇・芸術文化の受容実態を知る上で参考になるところもあるのではないと思われる。

実は、その老舗鑑賞団体ですら、昨今会員数の減少に頭を悩ませている。同会の会員は平成9年（1997）をピークに減少の一途をたどり、平成21年（2009）時点で約5,600人。この数字はピーク時の6割だというから、仙台ではこの10年余りで3,000人以上の観客が劇場から遠のいた計算になる。平成21年（2009）1月25日付の河北新報朝刊によると、同会事務局はこうした事態の背景に「会員の高齢化と不況」、また娯楽の多様化による「観客の分散化」があるとしている。

あるいはまた、平成17年（2005）3月5日付の河北新報朝刊、特集記事「『劇都』の舞台装置——仙台演劇事情（下）」でも、具体的な数値は不明だが、若い世代を中心とする小劇場系の演劇において、観客数の低迷・固定化・伸び悩みが切実な問題として指摘されている。

東北地方では最大の人口規模を持ち、明治40年（1907）に設立された東北大学はじめ多くの大学が集中する（であるがゆえに若者の多い街）「学都」仙台は、平成9年（1997）に「劇都」（演劇の盛んな都市）を名乗りはじめ、平成13年（2001）には伊達政宗による開府400年を記念して「仙台国際音楽コンクール」を開催、これを機に「楽都」（音楽の盛んな都市）を標榜するようになった。これらは音楽・演劇等、芸術文化の力で都市の魅力を高め、地域の文化水準を高め、かつ人を集め、その経済効果によって街を活性化しようという狙いがあった。それはとても大事なことだし、アイデアとしても決してわるくはない。

ところが実際は、90年代初頭のバブル崩壊以来、現在にいたる景気の低迷のなかで、新劇系の観客も、小劇場の観客も、分野と世代とを問わず、減少・低迷している。上記の新聞記事からは仙台のそうした現状が浮かび上がってくる。

ちなみに、小劇場第3世代を代表する野田秀樹の夢の遊眠社は平成4年（1992）に解散し、鴻上尚史の第三舞台は平成13年（2001）に活動を休止している（第三舞台は10年間の活動封印後、2011年末に復活／解散公演を行うと発表）。いわゆる小劇場ブームは、それじたいがバブリーな現象で、90年代末期にはほとんど終息に向かっていった。地方の小劇場系若手演劇も、若干の時差こそあれ、みな同じような道をたどった。

いや、若手演劇だけではない。たとえば、演出家木村光一が昭和56年（1981）に設立した地人会も、平成19年（2007）10月、ついに活動を停止した。同年10月3日付朝日新聞朝刊によれば、地人会の「経済的な基盤は活発な地方公演だった。東京で初演した作品を各地の演劇鑑賞団体の主催で長期公演することで、安定収入を得る“新劇団”の市場に参入。80年代には年間500回を超えた。だが近年、その基盤に陰りが出てきた。全国演劇鑑賞団体連絡会議によると、会員数は現在約21万人。ここ10年で7万人の減で、高齢化も進んでいる」という。これと比較すると、仙台における観劇人口の減り方はもっと大きいということがわかる。

それを思えば、宮城県民会館で開催される公文協の歌舞伎公演は、よく健闘しているほうであろう。いや、よく健闘しているどころか、なぜそんなに集客力が衰えないのか、なぜそんなに底堅いのか、不思議なくらいである。

一つには、やはりミレニアムの平成12年（2000）という時期に公演規模を

適切なスケールに縮小する判断を下したことが功を奏したといえる。その結果、動員面で2日4公演時代の余力(ゆとり)が発生した。また、ある程度は団体による組織的な観劇がいまだ有効に機能しているということもあるだろう。しかし、全体の5~6割を占める中高年の女性たちに、いつまでも頼ることはできない。

実は、仙台の強みはもう一つあって、それはこの種の(あえていえば、高齢者が好みそうな)古典芸能関係の公演では、比較的若い世代の観客が多いということである。

宮城県民会館の現状・その3 —仙台公演を支える若年観客層—

先に、県民会館のアンケート結果をもとに、観客の8割は女性であり、全体の55.5%が50代以上であると述べたが、観客の年齢層を昼の部と夜の部にわけて比べてみると、いわゆる主力層は、昼の部が77.8%なのに対して、夜の部は36.4%になる。他方、40代以下は昼の部がわずかに16%なのに対して、夜の部では57.6%に達する。しかも、このうち37.1%が20代以下の若年世代で占められている(以上の数値は昼夜別に集計していない平成19年をのぞく4年間の平均値である)。これはいうまでもなく、本学の学生たちがまじめにアンケートを書いている証拠である。

というのは冗談だが、回収率20%ほどのアンケートであっても、一般に古典芸能などに興味を示すとは思えない10代、20代の若い世代が仙台公演(特に夜の部)を支えているということは紛れもない事実であり、そして夜の部の4割弱を占める若年世代の主体がほかならぬ本学の学生たちであることは県民会館側も認めているところである。

それでは、本学関係者が仙台公演にどれだけ貢献しているのか、数字で確認しておこう。グラフ6は前出グラフ3に本学関係者の人数を組み込んだものである。ここでいう本学関係者とは、日本文学科の現役学生を主体とし、一部卒業生や生涯学習講座の受講生、教職員等、若干若くない世代を含む。基本的に我々は日中授業があるため、週末でない限り、昼の部を観に行くことはできない。そこで、1回あたりの平均入場者数を仮に「夜の部」と置き換えてご覧いただきたい。そうすると、我々が団体で観劇を始めた平成13年(2001)から右肩上がりでも本学関係者の参加人数が増え続けていることがわかる。最近5ヶ年(平成18~22年)の平均値では、本学関係者の参加

人数は約300名。平均入場者数に対する本学関係者の参加率を見ると約24%になる。つまり、夜の部だけでいうなら観客の4人に1人は（一部、気持ちだけは「若い」世代を含む）宮城学院の関係者ということになる。^{*23}

学習の一環として学校が団体で歌舞伎を観劇する事例は全国各地、枚挙に暇がない。とはいえ、多くの場合、さしたる関心もないのに学校行事として強制的に劇場に連れてこられ、おまけに予備知識もないものだから、観ていて面白いはずがない。生徒や学生自身に「自ら観る」「観たい」という意識が希薄な以上、居眠りが多いとか私語が多いなど、マナーの悪さばかりが目立つことになる。

本学の場合、まず第一に、学生たちの大半は日本文学科の学生として日本の（古典を含む）文学や文化に一定の関心をもっている。第二に、授業の一環としてすでに古典芸能について一定の理解と共感を有している。第三に、本学の学生たちは概して素直で真面目。マナーも決して悪くない。授業担当者としてはこうした学生たちの中から少しでもリピーターが増えることを願っているのだが、幸いなことに（あるいは期待に違わず）、多くの学生たちが翌年度も参加してくれている。

ただ、リピーターが増えれば増えただ、逆に公文協歌舞伎の抱える問題も目についてくる。それは演目の問題である。

公文協歌舞伎の場合、同じ演目がほとんど間隔を置かずに上演されるケースがしばしば見られる。歌舞伎は役者で見るものであり、演者が異なれば舞台の味わいも当然異なる。とはいうものの、さすがに上演間隔が近すぎると観客に飽きられ、客足が遠のく可能性がある。

表3および表4をご覧ください。そうすると、同じ「忠臣蔵」の七段目でも、平成19年（2007）の吉右衛門は平均入場率95.3%だが、その三年後、平成22年（2010）の幸四郎は79.3%である（同年度は昼夜別演目で、七段目は夜の部。入場者数1,261人）。あるいは、後者は夜の部だから入りが悪いのかと思えば、さにあらず。同一演者で同一演目というケースもあって、幸四郎の「勸進帳」は平成18年（2006）が平均96.7%であるのに対し、四年後の平成22年は83.2%に下がっている（昼の部のみ。入場者数1,323人）。あるいは、平成15年（2003）の菊五郎の「すし屋」は93.5%で、平成21年（2009）の仁左衛門は79.7%という結果が出ている。

もちろん、入りの良し悪しは景気に左右され、またその日の天気にも左右

される。演目だけの問題ではないかもしれない。あるいは、「入りがわるい」といっても、入場率が8割に達しているのだから、とやかく言うほどのことはない」という声もあるだろう。しかし、たとえば「勸進帳」が（あるいは幸四郎の「勸進帳」が）いくら傑作、名作、人気作^{*24} だとしても、やはり演りすぎは逆効果ではなからうか。

公文協歌舞伎にとって、新たな観客の開拓・獲得もちろん必要なことだが、それと同時に、一度つかんだ観客を放さない、逃がさない、ということも、負けず劣らず重要なことではないかと思う。いま述べたように、あまり間を置かずに同一演目を上演した場合、2回目はことごとく数字を下げている。比較的集客に成功している仙台ですらそうなのだから、他は推して知るべしである。主催館および公文協歌舞伎の企画・制作サイドには、基本的に上演間隔が近い演目はできるだけ避けるよう配慮をお願いしたい。

公文協歌舞伎はたんに初心者向けの普及公演というだけでなく、限られた上演時間と限られた演者・演目、そして館によって種々異なる舞台環境の中で、初心者はもちろん、リピーターも満足させられるような本格的な舞台を目指してもらいたい。

おわりに

さて、今年度は震災以外でも古典芸能や舞台芸術を取り巻く状況・環境にいささか変化があった。本稿を閉じるにあたり、そのことについて触れておきたい。それは放送関係の話題である。

通信衛星を使った有料多チャンネル放送にスカパー！（SKY PerfecTV!）がある。スカパー！には、この3月まで歌舞伎・文楽・能狂言・日舞・落語等、主に古典芸能を放送していた専門チャンネルがあった。松竹系の伝統文化放送である。伝統文化放送は平成9年（1997）5月に放送を開始したが、平成21年（2009）4月に視聴料金を大幅に値上げして歌舞伎チャンネルに名称変更。結局、契約者数の伸び悩みが原因であろうか、平成23年（2011）3月に放送を終了した。歌舞伎の放送枠は同じ松竹系の衛星劇場に一部移管されたが、いかんせん専門チャンネルではないため、以前に比べたら歌舞伎の放送枠は激減したといつてよい。

一方、地上波を手掛ける放送局でほとんど唯一舞台中継枠を持っていたNHKも、地上デジタル放送への全面移行（岩手・宮城・福島、被災3県

を除く)を理由に、本年3月、教育テレビの「芸術劇場」と衛星第2放送の「ミッドナイトステージ館」を終わらせた。これにより、芸術関係の番組はBSプレミアムに集約されるらしいのだが、なおNHKとしては今後国内の演劇は基本的に扱わない方針だという(2011年2月1日付朝日新聞朝刊)。それもこれも視聴者の興味・関心が多様化した結果であろう。

なるほど、スカパー!の歌舞伎チャンネルのようなものは、そもそも有料チャンネルなので本当に歌舞伎や文楽が好きの人(もしくは必要な人)しか見ない。それがビジネスとして成り立たない、採算が取れないというのは、その専門性・特殊性からいって、ある意味やむを得ないことかもしれない。だが、NHKは営利を追求する民間の商業放送ではなく、放送法に基づく公共放送である。NHKは公共放送の使命と責任をもって、むしろ視聴率優先の民放が制作・放送しないであろう良質な番組をこれまでも放送してきた。中でも音楽・演劇・芸能等、舞台芸術関係は、NHKにとって重要なコンテンツ(放送文化財)として位置づけられてきたのではなかったか。いや、そもそもNHKの(ということは日本の)本格的なテレビ放送の歴史は、歌舞伎の舞台中継から始まったのであった。^{*25}

テレビの本放送開始からおよそ60年。時は移り、日本人と歌舞伎との距離感も相当様変わりした。とはいえ、こうしたものが身近にない(ふだん馴染みのない)大多数の人々にとって、生まれて初めて目にする歌舞伎・文楽・能・狂言がNHKの舞台中継だったという人は今も昔も大勢いるはずで、私自身、幼いころ(おそらく幼稚園か小学生の頃)たまたま目にしたモノクロ画面の「助六」(初春公演)の様子が今もありありと記憶に残っている。

その意味でいうと、NHKの舞台中継番組は一見近づきたい(と思われている)古典芸能の世界をより多くの人々に垣間見せる「窓」であり、一般視聴者(あえていえば日本人)と古典芸能の世界とをつなぐ、それこそ貴重なチャンネルだったといえることができる。

NHKはそれだけ古典芸能の保存・普及・啓蒙活動に寄与してきた。それはもう間違いない。だが、今後、歌舞伎俳優が大河ドラマに出演したり、メディアで注目されることはあっても、歌舞伎の舞台そのものをテレビで目にする機会は確実に減るのではあるまいか。

今回の大震災で景気はさらに悪化し、消費も低迷するだろう。興行界にも遅かれ早かれその影響は及ぶものと思われる。あるいは公文協歌舞伎もしば

らくは辛抱しなければならないかもしれない。が、東北はいずれ復興する。いずれ、必ず観客は戻ってくる。——そう願いたいところだが、震災とほぼ同時期に、地上波と衛星放送、双方で舞台関係、特に古典芸能関係の番組やチャンネルがなくなってしまったことは、今後、中長期的かつ広範囲にわたって影響が出てくるのではないと思われる。

いささか大げさに聞こえるかもしれないが、事はたんに歌舞伎を興行している一営利企業の問題ではなく、日本の文化力に関わる問題である。歌舞伎のような古典芸能をわざわざ観に来る人々は、たんに一企業を潤す顧客でもなければ、たんなる消費者でもない。そうした人々は、程度の差こそあれ、日本の伝統・文化・古典的な価値観をそれなりに理解し、敬意を払う人々でもあろう。観客を育てるということは、そういう人材を育てていくことである。

天下のNHKにそういう教育・啓蒙機能が期待できなくなるということは、今後ますます公文協歌舞伎の意義・役割・重要性が増すということであり、と同時に、主催館は相当工夫しないと中長期的に集客が難しくなっていくことが予想される。

そうした意味で、今後ますます教育現場での取り組みが重要になっていくであろう。我々には歌舞伎や文楽、能・狂言等、古典芸能の担い手（後継者）を育てることはできない。しかし、日本が世界に誇るこうした伝統文化の存続に関わり、これを盛り立て、ともに支えていくことはできる。また、そういう人々を育てることはできる。我々が行っているのは、つまりそういうことなのである。

【付記】 本稿をなすにあたり、財団法人宮城県文化振興財団には格別のご配慮を賜りました。特に担当の甘粕さんには、たびたび資料調査にお手を煩わせ、聞き取り調査にも応じていただき、たいへん感謝しています。宮城県民会館はじめ各地のホールはいまだ復旧の途上にありますが、これらの劇場が再び大勢の観客で賑わう日が必ず来ると信じています。

【注】

- * 1 宮城県民会館はネーミングライツの導入によって平成20年（2008）より「東京エレクトロンホール宮城」と称することになったが、本稿で

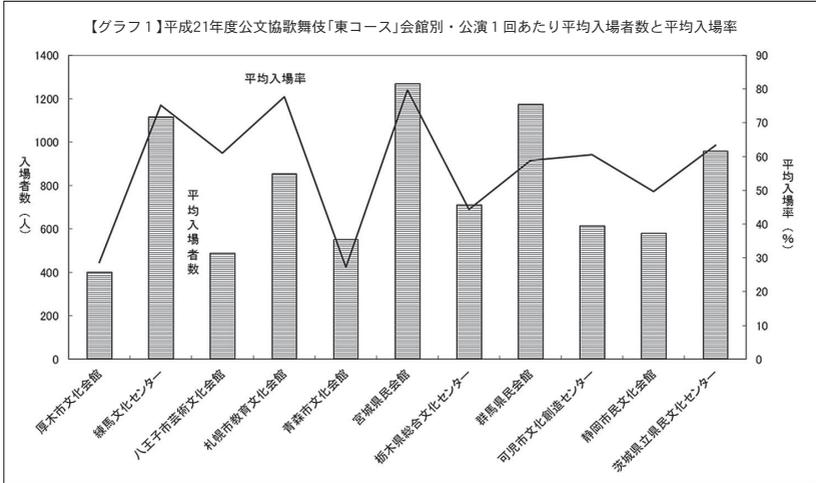
は正式名称である「宮城県民会館」と表記する。

- * 2 各館の被害の詳細は財団法人宮城県文化振興財団「宮城県内の文化施設の震災被害状況一覧（平成23年6月20日現在）」<http://www.miyagi-hall.jp/zaidan/sinsai2.pdf>参照。
- * 3 本年7月1日、電力使用制限令が発動され、契約電力500kw以上の大口需要家を対象に昨夏の最大電力量の15%カットが義務付けられた。東北電力管内は9月2日、東京電力管内は9月9日で解除となった。
- * 4 竹内伸二「公文協歌舞伎の現状からみる問題とその対応策」（社団法人全国公立文化施設協会編『公文協歌舞伎40年史』社団法人全国公立文化施設協会、平成21年〈2009〉10月）に、平成20年度の例として全国62の実施館の平均入場料金が記載されている。
- * 5 学生はもちろん一般社会人を含む古典芸能初心者にとって、「自分たちにもわかる！」以上に「自分たちにも笑える！」ことは、古典芸能という「他者」ないしある種の「異文化」に対し、理解と共感の回路を開く重要な鍵になっているようだ。
- * 6 拙稿「観客動向からみる文楽の過去・現在・未来（1）」（歌舞伎学会『歌舞伎 研究と批評』45号、雄山閣、2010年9月）以下、4回に分けて掲載予定。
- * 7 平成13年（2001）4月1日、行政機関情報公開法施行。同14年（2002）10月1日、独立行政法人等情報公開法施行。
- * 8 社団法人全国公立文化施設協会編『公文協歌舞伎40年史』社団法人全国公立文化施設協会、平成21年（2009）10月。
- * 9 社団法人全国公立文化施設協会のウェブサイト (<http://www.zenkoubun.jp>) 参照。
- * 10 岡崎哲也「製作からみる公文協歌舞伎公演の足跡と役割」、前掲『公文協歌舞伎40年史』所収。
- * 11 「アートマネジメント」という言葉の本格的な流通は90年代以降。日本アートマネジメント学会設立は平成10年（1998）である。
- * 12 今年は東北から関東にかけて実施館が被災したため、西コースを除く2コースが中止となったが、通常であれば東コースと中央コースの公演は7月に同時並行で行われ、西コースは9月に開催されることになっている。

- *13 前掲『公文協歌舞伎40年史』所収、安孫子正・平野英俊「多様な歌舞伎の魅力を地域に結ぶ 松竹（株）安孫子正専務に聞く」。
- *14 注4 竹内論文所収、図表2「松竹大歌舞伎の実績（3コースの計）」参照。
- *15 前掲『公文協歌舞伎40年史』所収、実績資料3「公文協歌舞伎公演会館別実施回数[昭和42～平成20年]」参照。
- *16 注14に同じ。
- *17 宮城県文化振興財団の設立は平成4年11月であるため、公文協歌舞伎（仙台公演）の記録も平成5年度以降のものしか残っていない。
- *18 豊川市文化会館の元データ（平成6～17年度）は、柳瀬優雄「公文協歌舞伎を民間団体で運営—その成果—」（社団法人全国公立文化施設協会『芸術情報アートエクスプレス』22号、2006年2月）所収「松竹大歌舞伎公演開催状況」に拠る。なお、豊川市の場合には時に東コース、時に西コースと、特定のコースに拘束されず、公演を実施している。
- *19 私の行った聞き取り調査において、会館側は値上げの理由を「収支状況と物価上昇等によるもの」と説明しているが、実際は90年代のバブル崩壊以降、物価はむしろ横ばいで上昇する気配のないことは周知の事実である。ということは、会館側の料金値上げ要因はもっぱら事業の収支バランスにある、と推測される。
- *20 宮城県民会館では、公演直前に独自の講習会を開催しているが、これはチケット購入者のなかの希望者と、国際交流事業の一環として公演に招待されている留学生を対象にしたものであり、必ずしも直接集客に役立つような取り組みではない。
- *21 なお、平成13年度は会場が宮城県民会館ではなく、若干キャパシティの小さな仙台市民会館（席数1,310）だったため、実人数に比して入場率がアップしている。いずれ統計資料というものには数字のトリックがつきものなので注意が必要である。
- *22 本稿校正時点（2011年10月下旬）で1ドル75～76円台。1ユーロは一時期（9月末）101円台にまで上昇したが、その後105円前後で推移している。
- *23 ただし実際は、本学関係者でも生涯学習受講者等、一部の部観劇組もいるため、夜の部に占める本学関係者の割合はこれよりも若干下が

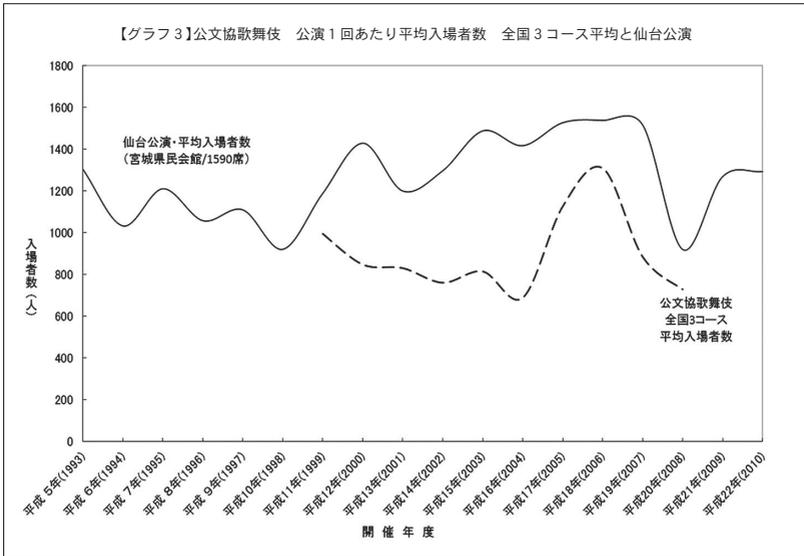
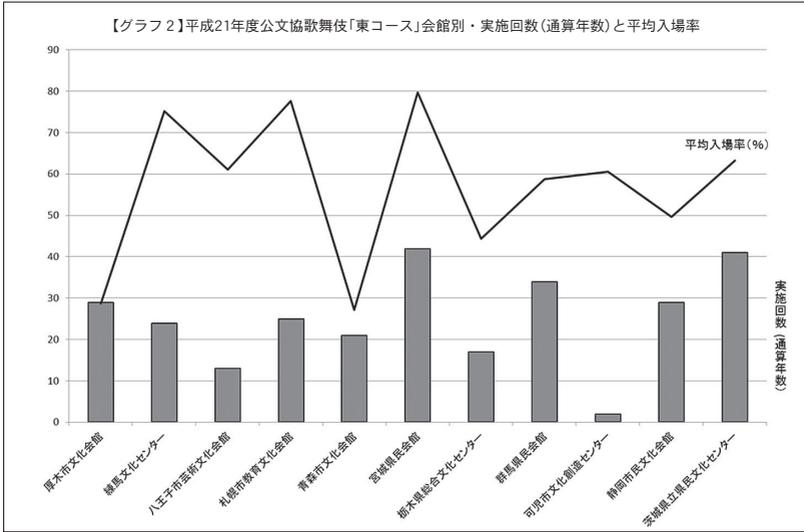
る。

- *24 松竹が実施した過去3回の人気投票（1987年／応募総数6,280通、1994年／8,778通、2008年／15,971通）でも、「勸進帳」は不動の首位を誇る。当代松本幸四郎は昭和33年（1958）、16歳の時に「勸進帳」の弁慶を演じて以来、52年の歳月をかけて、平成22年（2010）7月末に全国47都道府県で「勸進帳」上演達成。七代目幸四郎は生涯に1,600回弁慶を演じたというが、当代もすでに累計1,000回を超して、なお記録を更新中である。
- *25 NHK・東京テレビジョン開局記念番組は昭和28年（1953）2月1日、七代目梅幸と二代目松緑による『義経千本桜』四段目「道行初音の旅」であった。

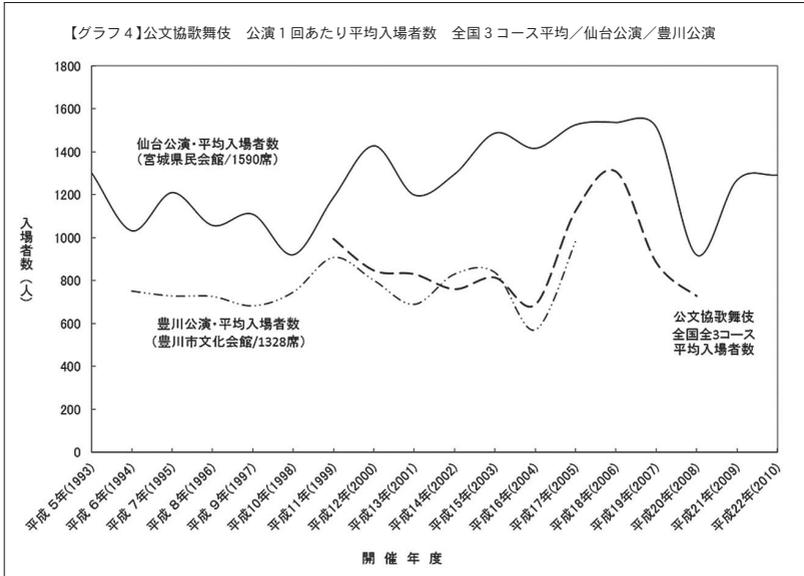


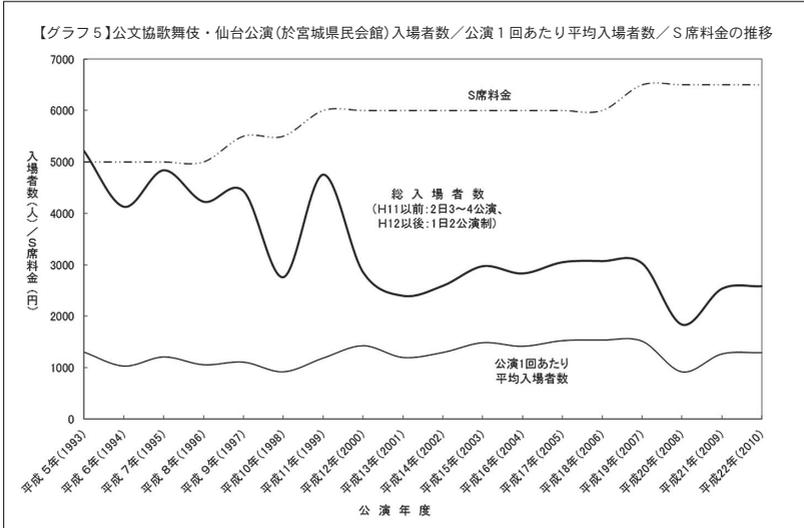
【表1】平成21年度公文協歌舞伎「東コース」～仁左衛門「すし屋」～

開催日	会場	総入場者数	平均入場者数	席数	平均入場率	実施回数
7/1厚木	厚木市文化会館	804	402	1400	28.7	29
7/2練馬	練馬文化センター	2233	1117	1486	75.2	24
7/3八王子	八王子市芸術文化会館	979	490	802	61.1	13
7/5札幌	札幌市教育文化会館	1710	855	1100	77.7	25
7/7青森	青森市文化会館	1105	553	2031	27.2	21
7/9仙台	宮城県民会館	2536	1268	1590	79.7	42
7/12宇都宮	栃木県総合文化センター	1423	712	1604	44.4	17
7/15前橋	群馬県民会館	2347	1174	1997	58.8	34
7/24可児	可児市文化創造センター	616	616	1019	60.5	2
7/28静岡	静岡市民文化会館	1159	580	1170	49.6	29
7/31水戸	茨城県立県民文化センター	1916	958	1514	63.3	41
		入場者合計	平均入場者数	席数合計	平均入場率	平均回数
全21公演		16828	801	30407	55.3	25



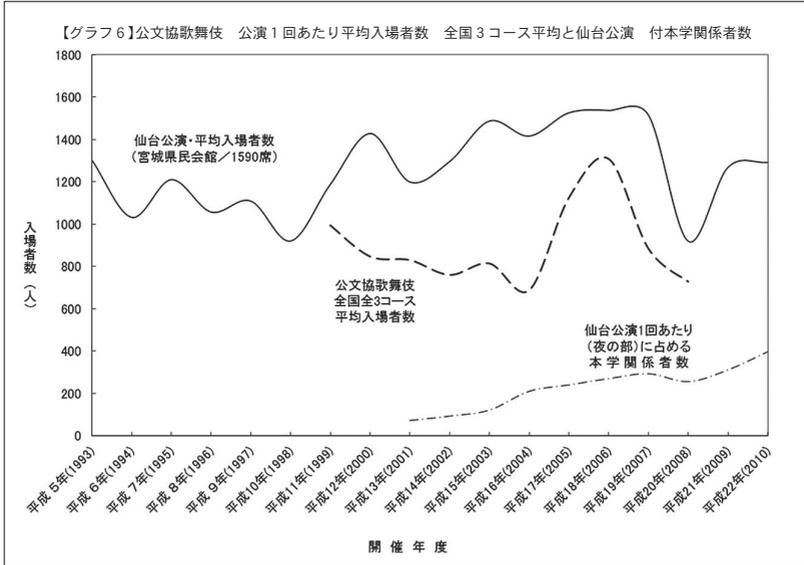
【表2】公文協歌舞伎 平均入場者数 全国平均／仙台／豊川			
開催年度	全国平均	宮城県民会館	豊川市文化会館
平成5年(1993)		1303	
平成6年(1994)		1032	751
平成7年(1995)		1210	728
平成8年(1996)		1057	726
平成9年(1997)		1109	682
平成10年(1998)		920	746
平成11年(1999)	994	1188	908
平成12年(2000)	847	1428	801
平成13年(2001)	830	1199	689
平成14年(2002)	760	1296	830
平成15年(2003)	814	1487	838
平成16年(2004)	688	1416	570
平成17年(2005)	1125	1526	983
平成18年(2006)	1308	1537	
平成19年(2007)	884	1515	
平成20年(2008)	728	919	
平成21年(2009)		1268	
平成22年(2010)		1292	
平11～20年の平均	898	1351	





開催年度	総入場者数	公演数	平均入場者数	平均入場率	本学関係者数
平成5年(1993)	5213	4	1303	81.9	
平成6年(1994)	4129	4	1032	64.9	
平成7年(1995)	4838	4	1210	76.1	
平成8年(1996)	4227	4	1057	66.5	
平成9年(1997)	4434	4	1109	69.7	
平成10年(1998)	2761	3	920	57.9	
平成11年(1999)	4753	4	1188	74.7	
平成12年(2000)	2856	2	1428	89.8	
平成13年(2001)	2398	2	1199	91.5	72
平成14年(2002)	2592	2	1296	81.5	93
平成15年(2003)	2973	2	1487	93.5	121
平成16年(2004)	2832	2	1416	89.1	210
平成17年(2005)	3051	2	1526	96	240
平成18年(2006)	3073	2	1537	96.7	270
平成19年(2007)	3029	2	1515	95.3	293
平成20年(2008)	1838	2	919	57.8	256
平成21年(2009)	2536	2	1268	79.7	311
平成22年(2010)	2584	2	1292	81.3	397
平成5~9年(4回公演)	22841	20	1142	71.8	
平17~21年(2回公演)	13527	10	1353	85.1	

平成13年度は仙台市民会館(1310席)で実施。もし県民会館なら入場率は75.3%になる。



【表4】 公文協歌舞伎 仙台公演 主な出演者と演目

開催年度	主な出演者	主な演目	備考
平成5年(1993)	芝翫、梅玉、東蔵、福助	毛谷村、藤娘、女伊達	梅玉・福助襲名披露口上
平成6年(1994)	雀右衛門、友右衛門、芝雀	葛の葉、落人	御目見得口上
平成7年(1995)	脩治郎、我當、秀太郎、甞雀、扇雀	封印切、鏡獅子、正礼付根元草摺	甞雀・扇雀襲名披露口上
平成8年(1996)	時蔵、團蔵、橋之助、高麗蔵	野崎村、棒しばり	御目見得口上
平成9年(1997)	富十郎、萬次郎、松江、扇雀	吃又、廓三番叟、鶯娘	御目見得口上
平成10年(1998)	左圍次、東蔵、松江、芝雀、男實	毛抜、二人道成寺	御目見得口上
平成11年(1999)	仁左衛門、田之助、左圍次、時蔵	鳴神、吉田屋/昼、引窓/夜	仁左衛門襲名披露口上
平成12年(2000)	菊五郎、田之助、萬次郎、菊之助	白浪五人男、身替座禅、宮島のだんまり	口上なし
平成13年(2001)	團十郎、芝雀、新之助、團蔵	忠臣蔵5・6段目、男女道成寺	口上なし
平成14年(2002)	富十郎、三津五郎、芝雀	石切権原、喜撰/昼、吉野山/夜	三津五郎襲名披露口上
平成15年(2003)	菊五郎、田之助、松緑、菊之助	すし屋、棒しばり	松緑襲名披露口上
平成16年(2004)	吉右衛門、梅玉、魁春、芝雀	引窓、落人	魁春襲名披露口上
平成17年(2005)	團十郎、海老蔵、市蔵	実盛物語、お祭り	海老蔵襲名披露口上
平成18年(2006)	幸四郎、染五郎、高麗蔵	勸進帳、歌舞伎噺(歌舞伎の解説)	(口上ならぬ)ご挨拶
平成19年(2007)	吉右衛門、染五郎、歌昇、芝雀	祇園一力茶屋、玉兎、太刀盗人	口上なし
平成20年(2008)	梅玉、時蔵、東蔵、錦之助	毛谷村、橋弁慶、神田祭	錦之助襲名披露口上
平成21年(2009)	仁左衛門、秀太郎、孝太郎、愛之助	千本桜3段目(椎の木・すし屋)、正礼付根元草摺	口上なし
平成22年(2010)	幸四郎、梅玉、魁春	重井子別れ・勸進帳/昼、雨の五郎・祇園一力茶屋・近江お兼/夜	口上なし